
マハラジャな人々

品川かのこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マハラジャな人々

【NZコード】

N6010Y

【作者名】

品川かのこ

【あらすじ】

学校の課題で砂丘を見に行つた帰り、なぜか本物の砂漠に紛れ込んでしまった主人公。そこで出会つた人々はなんだかマハラジャな方々で……。異世界召還系ラブコメディ（になるはず）です。

1・はじまりは砂漠から

太陽が、視力を奪つてやるどばかりにちゃんと輝いている。ああ、空は青空、世界は平和。

強い日差しを受けて私の影が白い砂にくつきりと落ちている。私が高校に入学したのは昨年の春のことだ。今は11月。時の経つのは早いもので、始めは履き慣れなかつた革靴も半年が経つた今では体の一部のように馴染んでいる。

今は両足とも砂に埋もれて足首しか見えないけど。
ええそう、お気に入りのプリーツスカートも砂埃に震んで白いけど。

気が付けば私は何故か砂漠のど真ん中に突つ立っていた。

「やつてられつか！！」

私は世界を祝福するのをやめてキレた。そりやそうだ。授業の課題を済ますため学校帰りにちょこっと砂丘を見に来ただけのはずが、なぜか本物の砂漠に投げ出されてしまったのだから。

原因も現在地もさっぱりわからない。確かに地域学習うんたらで、身近な観光地を調べる係になつて、砂丘を見に来て、ちょこっと砂の上を歩いてたらだんだん暑くなつて、気付いたらこの状況、と。ともかく現状を開拓するべく元来た道を辿つてみたりもしたが、行けども行けども終わらない砂漠だった。十分ほど歩いてようやく気付いた。こりや本物の砂漠だと。まさかあのしょぼい砂丘が本物の砂漠と繋がっていたとは知らなかつた。

しかし、11月なのにこの日照りとはさすが砂漠。日本なのにね。ね。日本ですかここ？

あまりにも有り得ない状況にファンタジー的な単語が脳裏を過ぎ

つたりもしたが、深く考へないことにしておぐ。

それにしても暑い。冬服の厚手のブレザーにこの陽射しは耐え難い。ていうか日焼けしそう。などなど考へながらふと下を見ると足元にできた影の中、ちょっと早めに起き出した虫が涼んでいた。おうおう、かわいいのう、今見渡す限り存在する生物は私とお前だけだよ。私はそつとその虫をつまみあげる。やたらツルツルしていて金色だ。私はソレを投げた。

「人の影で涼むなコノヤロー！」

ああ、暑さとはなんと恐ろしい。やり場のない苛立ちをもたらし、私のような慈悲深い人間からさえも哀れみの心を奪ってしまうのね。

虫は「ブイ〜」と悲しそうな羽音を立てて、飛んでいった。

ちょっと清々してニヤツと笑つてしまつ私。いや、私、優しい女子高生だよ、うん。この暑さが悪いのや。

そういつするつりなんだか喉が渴いてきた。あいにくと飲み物は持つていない。でも、あつひひち歩き回つても、余計に迷うだけで終わりそうな気がする。

かといって、この砂漠の真ん中で、ボサツと突つ立つてゐるも気が滅入るが。

ウーム…。

「座つとこ」

ウロウロしても仕方ない。そのうち誰か通りかかるだろう。最悪、誰も来なくとも、家族には砂丘に行くつて言つてあるし、そのうち探してくれるはずだ。この砂漠が本当に砂丘とつながつているのならば……あ、いやこの考へはやっぱナシで。いやな答へに辿り着きそうだ。

とにかく落ち着いて救助を待てる場所を作ることにした。まず、砂を少し掘つて体を横たえる空間に仕上げる。次に鞄から体操着を引っ張り出して、定規と筆箱、弁当箱を支えにして、一重の幕を張つた。こうすると砂漠でも涼しくいられるつて、前になんかのテレ

ビで言つてたんだ。体操着にデカデカと前のゼッケンついてるから、恥ずかしいけど。

ミー天幕の下に体を滑り込ませる。つーん、そんなに涼しくはないけど、何もないよりマシだな。ちょっとは樂みたい。天幕の中では横たわる以外できることもなかつたので、ちょっとと眠ることじた。目を閉じて呼吸を整えていく。。

と、その時。半分砂に埋まりそうな私の耳が、かすかな話し声を捉えた。

誰か来てくれたんだ！

思わず起き上がりかけた瞬間、想像を超えた言葉が鼓膜を震わせた。

「ヌヤー。チヨベリピッチヨン」

ちよつとまで、今なんつた？

声 자체は、凛々しい男の声だけど、なんか内容おかしい。怖いな…起き上るのはやめて寝たふりを敢行することじょう。それでも、なんか外国語っぽいけど…。声はそれだけでは終わらず、更に続く。

「ニヤシロ、ワンワンヨベ。ペリヤサラマキンヌ
「キツニコマグネ？」

「シマダテブー」

「ニリヤ。ワンワンヲヨベ」

「ココ。ワンワンヲヨベ」

… ますます意味が分からぬ。どう考へても日本語ではないのに、発音が日本語そつくりなのだ。もしかしてすごい方言とかなのだろうか。だとしたら一体この状況でワンワンを呼んでどうするつもりなんだろう、そして島田さんを「ブ」とか言うな。

二人の外人らしき男たちはどうも私に用事があるらしく、交互に声をかけはじめた。

「ワンワン～サリ」

「ワンワン～」

近くまで来て天幕に手を差し伸べているようだ。顔は見えないが、天幕の隙間からサンダルのようなものを履いた足とじやらじらしが腕輪をつけた手が見える。優しい声音で呼びかけてくる。

「ワンワン～」

「……って、ワンワンって私かよ！」

思わずがばつと跳ね起きて簡易天幕を吹っ飛ばし、ツツコミを入れてしまった。

「ワンワン！」

やたら嬉しそうに叫ぶ外人たちともろに目が合つてしまつ。しゃがみこんでいる一人はこの上なく嬉しそうな表情で私を見つめている。うち一人は茶髪に金色の瞳、もう一人は黒髪に青い目。茶髪のほうが十代後半で黒髪は二十代前半といったところか。どちらも女子高生の集団に放り込んだらきやーきやー言われそうな整つた顔立ちをしているが、なにより私の目が引き付けられたのはその一人の服装だった。

肩の開いた白い布のようなものを基本に、それぞれ硝子玉の首飾りや、やたら細かい細工のベルトなんかをうつとおしゃくらい重ね

ていて、右肩からは、だらっとしたペルシャ絨毯のよつたものを垂らしていた。

何だ、この異文化つぶりは。
とても日本の寂れた観光地で出会う人間の服装とは思えない。
もしや夢なのではと思って頬をつねるが、痛かつたので現実のようだ。

「ワンワン～ヌラ～」

一瞬気を抜いている隙に、意外と近くから声が聞こえた。気付けば外人たちは私を挟み撃ちにするようにして迫つてきている。茶髪の方なんか、息が顔にかかるくらい近い。

「ぎやー！近つ！なんだあんたら！こつちくんな！」

しかしどうやら日本語は通じないらしく、一人の外人はワンワンワンワン言いながら更に近寄ってきた。おまえら三歳児か。

茶髪から身を逸らすとその分だけ黒髪に距離を詰められ、逃げ場がない。はつ、もしやこいつら、いたいけな私をどこかにさらつていくつもりなんだろうか。外国では日本人の女の子は人気だとか聞いたことあるし！

私は恐怖を感じ、砂をすくつて茶髪の外人の顔目掛けて投げた。
「シャラポア！」

効果抜群。茶髪はなぜか国際的テニスプレイヤーの名前を叫びながら砂の上をのたうちまわった。この言語、規則性とかなさそうだな…。

茶髪ののたうちまわりつぶりは、芸人だつてこんなオーバーリアクションしねえよと言うくらいすさまじい。ちょっと可哀相だけど乙女の危機だから仕方ない。もう一人も同じ日に会わせて逃げようと、砂の中に手を突っ込んだ。

そのとき。

砂に突っ込んだ指が何か硬いものに触れた。なんだか、と思つ
間もなく、目の前が真っ白になり。

すぐに元に戻つた。

なんだろ今の…。立ちくらみ?

しかし、次に聞こえた言葉に、私は更に驚くことになる。

「痛てーー目エ超痛てエー！」

それは聞き慣れた日本語だったのである。

2. 掘り当たるもの

一体何が起きたのかよく分からぬが、とりあえず茶髪ペルシャ
絨毯は突然日本語を叫びながらのたうちまわつていた。

「痛ええええ！目え痛えええーー！」

その発音、碎けた若者言葉の使い方までどこからどう聞いても日本語だ。さつきまで謎の言語を喋っていたといふのに。

「たんて」と「たんて」

なんでお前が俺の目に砂かけるからだぞーかああああ！！！
茶髪がわめいた。ああいや確かにそうだけども。

「イシューさま、大丈夫ですか？」

今度は黒髪ペルシャ絨毯が日本語で無い、おろおろと茶髪に駆け寄つた。どうやら茶髪はイシローといつておらし。イシローは未だ地面でのたうつておつ、その姿はせながらヤダヤダをするヤビものようであつた。

腕や足に大量に飾られた金属の輪がジヤランジヤラン鳴つて非常につるさい。彼の赤いペルシャ絨毯は砂にまみれて大変もつたいないことになつてゐる。

それにしても、イシューがやられても黒髪が「ちくしょうやりやがったなー」とか言ってこないあたり、どうも悪党の類ではなかつたようだ。あれ、ちょっとやりすぎたかな……いやでも、ワンワンとか言いながら女の子に迫つてくる方も悪いと思つのーと血分を正当化しておいてみる。

「ナシロつ、絶対俺たち担がれただろ！こんな野蛮な女が天秤なはずないって！」

「落ち着いてください、とにかくまじ、これで目を洗って」

「……ああ、うん、洗う……」

ナシロ、と呼ばれた男が水筒らしき筒を差し出すと、イシューは大人しくそれを受け取り、少し離れて背を向けた。

しかしさつきからこの茶髪、団体はでかいくせにほんと子どもみたいだな！ 田薬のように田に水を垂らして、いてーなどと言ひながら瞼をしばしばさせていた。

こいつが子どもとするときしおめお母さんのほう、ナシロが私に向き直つて言つた。

「申し訳ありません、驚かせてしまつたようだ。私も殿下も悪気はなかつたのです、どうぞお許しください」

両手を合わせて深々と頭を垂れる。その丁寧なときたら、つむじを通り越して彼のうなじがよく見えるほどである。あまりにも畏まれて、私は逆にびびつてしまつた。

「えつ、ああ、いや、その。私もちょっとやりすぎちゃつたと思ひます、はい」

「全くだ」

遠くからイシューがぼそつと呴いた。なんだこいつ、元はあんたのせいでしょうが！

ナシロがイシューに咎めるよつた視線を送る。

「殿下。もう洗い終わつたならこいつちに来てください」

「へいへい」

水筒の栓を閉め頬に垂れた水を拭うと、ふてくされた様子でイシューが戻つてきた。

両手を頭の後ろで組んで明後日の方向を向いている。実に態度が悪い。態度が悪いが、こうして改めてペルシャ絨毯男が一人並ぶと、なんだか圧倒されるものがあった。まず、髪の色、瞳の色が日本人では有り得ない。肌の色も黄色人種にしては濃すぎるし、顔立ちも彫りが深い。

「これはひょっとすると、いやもつ高確率でどうやら、何か」いづ、ファンタジー的なアレが……。

いや、」いづは一縷の望みをかけて一応聞いておいた。

「日本とかアメリカとかヨーロッパ、中国つて聞き覚えあります?」「え? すみません、ちょっとよくわからないです」

「聞いたこともねえよそんなん」

はい確定ー。まさか日本の砂丘から徒歩でいける場所にアメリカもヨーロッパも知らない人間が住んでいるわけがない。といふか今まで考えないようにしていたけど、この時期にこの気候、百歩譲つても日本じゃ有り得ない。

頭が痛くなつてきた。

といふことはつまりには所謂異世界、とかこうやつ? そんな馬鹿な。

だつて異世界とか、そんな、ねえ?

あ、きつとこれ夢なんだ、そつか一砂丘で横になつてゐつては寝つちやつたんだね。だつたらもう一回寝よつ。

私は考えることを放棄した。

ミー天幕があつた場所に横たわり、鮮やかなペルシャ絨毯どもが見えないよう目を閉じる。ああやつれ、これは夢だ、だからもう一度目を覚ませばきつと現実さ!

安らかな眠りのポーズをとつた私を奴らが囮む気配がした。

「何してんだよお前……」

「あの、お疲れなのでしょうか、でしたらこんなところで休まれずとも……宿をご用意しますよ?」

「つかおまえ本当に天秤なわけ? とてもそつは見えねえんだけど」
交互にぼそぼそと話しかけてくる。眠れないからやめろよー

しかも砂漠の癖に背中になんか「ゴジゴジ」したるもの当たつてるし、なにこれ石かなんか？

もしかしてわざわざ立ちくらみがしたときに指に当たつたやつだろうか。

本当やめてほしい。イライラすることばっかりだ！

だつて「ゴジゴジ」して痛いつてことは、これが現実だつてことじやないか！

「ああああもう…」

私は起き上がると左右の男たちを睨み、私を夢からたき起こしたにつくき「ゴジゴジ」を排除すべく砂を掘つた。それはもう勢いよく。奴らが呆気にとられている気配を感じたが、もうなんか何もかもどうでもいい。イシューは私が払い上げた砂がまた目に入つたらしく、「きやあ」と呻いていた。残念な奴だ。

「いつてええええ！　お前ほんといい加減に

「あつたあ！」

イシューを無視して「ゴジゴジ」の正体を取り上げる。それは石ではなく、鎔びた金属で出来た、ずいぶん凝つた意匠の細工物だつた。中心の軸から左右対称に腕が伸び、それぞれの端に丸い玉がのつている。それはまるで、

「……やじろべえ？」

「天秤だ！」

右隣から身を乗り出すようにしてイシューが叫んだ。あまりにも大きな声だったのでびっくりしてしまつ。反対側ではナシロが目を見開き、息を呑んでいた。

天秤？これが。どう見てもやじろべえにしか見えないけど。

きょとんとする私の両腕をイシューが掴んだ。そのまま、顔をぐいと近づけて話しかけてくる。その目はきらきらと輝いていて、そ

れで。

「やはりお前が天秤か！　ずいぶん探したが甲斐があった。ずっとお前に会いたかったんだ！」

整った顔立ちに満面の笑みを浮かべて言った。

えーと。

ええーっと。

さつきまでと随分態度が違つよつた氣がするのとは氣のせいでしょうか。

目によく砂が入る残念なイケメンが、その目を輝かせながらよく分からぬことを言つてくるのですが。

しかも目が砂のせいで充血してちょっと怖いのですが。
会いたかったって何？　誰に？

すっかりフリーズした私に、ナシロが横から助け舟を出した。

「おおおお落ち着いてください、殿下。まつ、まあ、こ興奮するお

おお気持ちちはわかりますぎやつ」

頼むからちゃんと助け舟になつてほしい。

「とつととにかく、まずは私たちの身分を明かしまして、でないと何もお話ができませんから」

「ああ、それもそうだな」

イシューはようやく私の腕を開放すると、肩から垂らした絨毯を翻し、砂の上に肩膝を付いて頭を垂れた。

「俺はイシュベル・ルティ・フェ・ナディール。ここより南方の王国ナディールの王子だ。イシューと呼んでくれ。こちらは俺の従者ナシロ・レティ。俺たちは我が国に“天秤”を迎えるべくここへ来た」

五秒ほどの沈黙の後、私は眉間に指で押えた。

「……あー、えーと、『じめんちよつ』と意味わからない」

王子？ この茶髪ペルシャか？ そういうやナシロがちよくちよく
殿下とか呼んでたようなそうでないような。

「殿下、異界の天秤には言葉が難しうござたんじやありませんかね」
「ああそーか。おい、いいか天秤」

イシニイが謡の身振り手振りをしながら謡しかけてきた

あつち。俺、お前連れてかえ

「いや言語は分かるのでいいです」

なんだあのジエスチヤー。ハイのどじゆで右手を上げて一回転する必要がどこにあったのだろう。

「なんだ、言葉は通じているんじゃないのか。だったら何がどう理解できないんだ」

腹の立つ奴だ！

「正直何もかも全て意味が分かりません。ここは異世界なの？ どつかの国の王子がなんだこりなどいるの？ それに天秤つて何？ 私のことなの？」

「は？ お前まさか自分がなんでここにいるかも分からぬのか？」

「分かるわけないでしうが！ だいたい、いきなり……」

その時。

ずっとかんかん照りだつた陽射しがさつと翳つた。

辺りは急に薄暗くなり、暑かつたはずの砂漠は肌寒いほどの気温に変わる。

空を見上げると黒く分厚い雲が太陽を覆い隠している。不穏な空気が漂いはじめた。

「な、何、これ……」

あまりの変わりように驚いていると、イシューが舌打ちした。

「運が悪いな……もたもたし過ぎた。行くぞ。すぐに雹が降る」

「ひょ、ひょう！？」

さつきまで長袖じやいられないほど暑かつた砂漠にビリしてそんなものが。

しかしこの気温の下がりようからすると、あながち嘘でもなさそうだ。イシューは有無を言わさない勢いで私を引きずり起こした。「砂漠の雹は小石ほどだ。当たれば怪我じゃ済まないぞ。とにかく走れ」

「でも私、荷物が」

体操服やら筆箱が散らばつている辺りを見やると、既にナシロが鞄のジッパーを閉めるところだった。

「僭越ながら全てこちらに詰めさせていただきました。行きましょ

う

「そういうことだ、走れ！」

イシューが私の腕を掴んで走り出す。わけが分からぬまま、私はイシューに従つた。

しばらく走ると砂漠の中にこんもりと木が茂つている場所が見えた。

いわゆるオアシスといつものらしさ。

そこでようやく、走る速度が弱まった。一、三分とはいえ砂の上で全力疾走するのは十分に辛い。

普段あまり運動をしない私はもう限界で、半分イシューに引きずられているような状態だった。

「がつ、んばれっ！ あそこまで行けば、安心だからっ」

引っ張っているほうもきついのだろう、イシューが息も絶え絶えに言ひ。ナシロは口を利く余裕もなさそうだ。

今日は鞄に辞書とか便覧とか沢山入れてたからな……。

ああ、それにしても何で私は初対面のペルシャ絨毯男たちと砂漠を全力疾走する羽目になつたんだろう。

何か悪いことしたつけ！？

半泣きの私の隣でドフッ、という鈍い音がした。

踏み出した足から十センチほど右のところ、小さいけれど深い穴が開いている。

なんだ？

後ろのほうからも、続けてドフッ、ドフッといつ音。

固まる私にイシューが叫んだ。

「くっそ！ 降り出してきやがった！…」

つてことはこれが電！？

な、なんちゅうとんでもないものが降つてくるんだ！

あの大きさ、威力、当たつたら確かに「冗談じゃ済まない。肺も足も痛くてしょうがなかつたが、走らなければ。

とにかく必死で足を前に出す。出す。

一步一步が砂に埋まってなかなか進まないけれど、気付けばオアシスはもう目の前だつた。

ヤシの木のような幹の太い木が並んで茂つてゐる。あと少し。

あと少し！

「ええ、言ひながら木の下へ滑り込む。イシューに手を引かれて、幹にぴったりと沿つて、背を預ける。」

ナシロも間に合つたらしい。

そのままであるが、と座り込んだ途端、激しい音と共に砂漠が白ニリハドン。

卷之三

まるで爆発音のようだ。想像の範疇を超えた光景に私は目を見開く。

砂漠全体を真っ白く覆うそれは、雹だった。
あまりにも沢山、あまりにも勢いよく降る、子どもの拳ほどもある大きな雹の嵐。

「大地を分かつ、砂漠の、天秤に、光あれ。間に合つたのは、きっと、あなたのおかげですね」

「何が、光あれ、だ。いつしょに、死にかけて、おいて」同じく、ぜえぜえ言いながら、イシューが仰向に寝転んだ。

首をこねりに傾けて上目遣いに私を見る。

「ニニニナリ、瞬ニハリ、アリル」

いいから、聞け。そろそろ、大丈夫だから」
イシューは目を閉じて大きく深呼吸した。

「 よし。まず、ここは恐らく、お前が元いた、場所からすると、異世界だ。俺はさつき言ったとおり、ナディールの王子。天秤といふのはお前を指して、呼んだ。砂漠の天秤、お前を見つけるため、

俺はここまで来たんだ

……やっぱり意味が分からぬ。今まで一番丁寧に説明してくれているのは分かるのだけど。

天秤、って、一体なんのことだ？

そういえばさつき掘り当てたやじろべえのこと、イシューが天秤って呼んでなかつたつけ。

この細工物、なんとなく握つたまま持つてきました。
片手から少しばみ出す程度の“天秤”を見つめていると、ナシロが労わるようになつた。

「理解できずとも仕方ありません、こちらにいらしたばかりでまだ混乱していらっしゃるのでしょう。その上このように急に走らされたのでは。雹が止んだら急いでルーパの街まで戻りましょう。そこではまずはゆっくりと休んでください」

ありがとう、それにしてもナシロの回復早いな！イシューはまだ少し苦しそうにしている。

田の前の砂漠では、止む気配もなく雹がドカドカ降つてゐる。

やつぱりここは完全な異世界なのだ。

だつてこんなとんでもない雹も、それに耐えられるような木も私の世界には絶対、存在しなかつたはずだ。

一体どうすりやいいんだ。とにかくこの状況では大人しく彼らについていくしかなさそうだ。くそう。

果たしてこの雹が本当に止むのか疑問だつたが、現地人が止むと言つてゐる以上そのうち止むのだろう。

体がクタクタだ。ルーパ（ついに異世界の地名まで覚えてしまつた）とやらに行くまでどれくらいかかるかは知らないが、今は全力で休むことしよう。私もイシューの真似をしてずるずると仰向けに横たわる。

「じろん、と右に寝返りを打つとこちらを見ているイシューと視線

が合つた。

ん？ 何も考えずに寝転んだけど、随分距離が近い。

しかも何だか奴の視線が熱っぽいような、そうでないような……？

思わず身じろぎをした私の頬にイシューが右手を伸ばしてきた。

なんだこれ。

離れたいのに、体が疲れきついて思ひ通りに動かない。息も乱れて声が出ない。

上体を寄せてきたイシューの、吐息がかかるほど顔が近い。

なんだこれ、ほんとなんだこれ！

頭がぐるんぐるんする。

これつてもしかして乙女の危機つてやつじやないんですかね！？ そうですよね！？ なんでぼけつと見てるんだナシロオオオオオオ！？

長い指がほつぺたに触れる。

ああもうだめだ、ほんともうだめだこれ。

目の前がぐにゃぐにゃと歪む。

イシューの茶色い髪と金色の目が幾つにも増殖して見える。すっと通った鼻筋、長いまつげ、形のいい唇。おおイシュー、あなたはよく見るとイケメンだったのですね でもやめてくれ。そして囁くようにイシューは言つた。

「ずっとお前を待つてた。砂漠の天秤。俺の」

俺の、に続く一言が聞こえた瞬間。
混乱がピークに達した私は、気絶するように眠ってしまったのだ
つた。

4・ワンワン

イシューの声は綺麗なアルトで妙に耳に残った。息切れの名残が、少しかすれた甘い声。

お前は俺の。

イシューは言った。

お前は俺の、ワンワンだ。

「誰がワンワンだああああー！」

叫びながら跳ね起きると「ゴシン」と鈍い音がして、頭のてっぺんが硬いものにぶつかった。い、いたい。いや、石頭だからそんなに痛くないけど。

「う、お、お田覚めですか……」

頭上から苦しそうなナシロの声が降ってきた。え、なんで頭上から。よくよく回りを見てみると、どうやら私はナシロに後ろから抱きかかえられているらしい。

足元がふわふわする。といつか足が地面についていない。田の前には謎のケダモノの後頭部。

そこまで認識して、よつやく自分が動物に乗つて移動していく

とに気が付いた。

「何この状況！？」

「やつと起きたか、天秤」

からかうような口調で言いながらイシューが隣に並んだ。ヤツも同じケダモノに騎乗している。初めて見る動物だ。ラクダのようなアルパカのような横顔が一瞬見えた。

「雹が止んでも中々目を覚まさないから寝ているうちに運ばせてもらつた。もうすぐルー・パに着く。しかしそうい面だったが、さつきの頭突き」

「ぐ、いえ、この程度、平氣です殿下……」

ナシロが呻くとイシューは意地悪く、けけけと笑った。本当にいけ好かないヤツだ。

なるほど、状況を把握してみるとどうやら私はかなり長いこと気絶していたらしい。

さつきまで殺人的な雹が降っていたのが嘘みたいに晴れていて、首だけ動かして見上げた空には雲ひとつない。頂点近くにあつたはずの太陽は随分と地平に近づいており、日没が近づいているのが分かった。

私の体は紫色のペルシャ絨毯に包まれていて、その上からナシロに支えてもらっている。かなりの密着度だが、ナシロはお母さんポジションだなーと思つていたからだろうか、不思議と嫌な感じがしなかつた。イシューとは違つて。

「イシューとは違つて！？」

「あああああ！ そうだよ！ 気絶したのあなたのせいじゃん！」

「うつ、あ、あまり動かないでください」

思わずイシューの方へ身を乗り出す。ナシロが困つているが知つたことではない。自分の主人がセクハラ行為に手を染めようとしているところを止められないのが悪いのだ。

イシューは面白いものを見るみづみーヤーーヤーして、少し首を傾げながら私を見ていた。

「俺が？ 何か悪いことしたか？」

野郎、しらばっくれるつもりらしー。ちょっと顔がいいからって調子に乗りやがつて……。

私は力いっぱいイシューを睨んだ。

そういうえば今氣付いたが、ヤツは妙に色艶の良い茶髪の襟足だけ、長く伸ばして三つ編みにしているようだ。それが沈みかけの太陽を背にしてきらきら輝いている。ああ、ぶつた切つてやりたい。私は息を吸い込んだ。

「初対面の女子にあんなに近づくなんて失礼だと思わないわけっ？」

「隣に寝転んだのはお前だ。べつに俺がわざと近づいたわけじゃない」

「嘘付け、そのあと上半身起こして近寄つてきたでしょうが！」
ここで初めてイシューは視線を逸らした。小さい声で何かつぶやいている。

「ちつ、おぼえてたか」

「覚えるわ！！」

完全におちよくられている。ふ、ふぞけやがつて……怒りのあまり体が震ってきたわ。

殴りたい衝動を必死に抑えていると、ナシロがぽんぽん、と背中を優しく叩いた。

「すみません、不愉快な思いをさせてしまって。出会つたばかりの相手にあんなに近寄られたら誰だって嫌ですよね。ただ、走りつかられてぼんやりしていただけで、殿下に悪気はなかつたんだと思います。ほら、イシューさまもちゃんと謝つて」

ナイス助け舟。ナイスお母さん。

家来に優しく、しかし厳しく促されて、イシューはどうとう觀念したらしく。決まり悪そうに後頭部を掻きながら言つた。

「あー……と。すまない、調子に乗りすぎた。まさか氣絶するほど驚かすと思わなかつた。悪かつたよ。ただ俺は本当に、子どもの頃からずつと、『天秤』に会えるのを待ちわびていて。それでお前が目の前にいるのがつい、嬉しそうで」

「ほつほつと並ぶ謝罪の言葉。

が、途中から若干怪しい感じになつてきたりよつとやうにな……。いやここはスルーしておこう。氣付かないほつが幸せなことつてあるよね。

「もういいよ、反省してるのはわかつたから」「や、そうか?」

本当はもうちよつと突いてやつたが、身の安全のために切り上げることにする。代わりにほつと氣になつていていた疑問にカタをつけることにした。

「で、ワンワンってなんなの?」

「「は?」」

イシューとナシロの声が重なつて聞こえた。

ハトが豆鉄砲を食らつた顔、といふのはこういふのを指すのだろうか。イシューのさらさらの茶髪の下で、金色の目と口がぽかんと開いてこの上ない間抜け面だ。ナシロの顔は私の頭の上だから見えないが、せつと同じような表情なのだろう。

数秒の後、沈黙を破つたのはイシューだった。

「何つて……ワンワンはワンワンだろ」

「ええ、ワンワンとしか言こよひが」

いやいや待つてくださいよ。

「ワンワンってあれでしょ？ 赤ちゃんが犬を呼ぶときの……」

「？」

今度も一つ声が揃つた。

あ、頭が痛い……いつたいなんだっていうんだ。どうやらこの世界では“ワンワン”という単語が、何か特別な意味を持つていてるらしい。

「犬の赤ちゃん言葉はハウハウだる、ワンワン言葉が通じるのに本当にわからないのか?」

「ちょっと私の世界とは言葉の意味が違うみたいで……。なんかこ

う、言い換えて説明できないの？」

「言い換え、ですか。しかしワンワンはこう、崇高で抽象的で偉大

「それに宗教的な見方をすればワソワソはつまりお前だと解釈する」と考できる

途方

遂方にくれた私にナシロが背中からそこと語りかけでくる

「例えば、今私たちが乗っているのはパラウマですが、これはなかなか賢い生き物です。水をあまり必要としないし、食べ物がなくても一ヶ月ほど元気に動きまわることができます。砂漠の側に住むには欠かせない生き物ですね。ところで、この一つの頬ひげを軽く引っ張つてみてください」

何が始まるのかわからないが、ワンワンの意味を理解する手助けになるなら、とケダモノの頬へ手を伸ばす。一際長くて硬い毛を掴み、ゆっくりと引っ張った。

パラウマは「ブヒー」と啼いた。

「これがワンワンドア」

「ああそうだな、これもワンワンの一種と言えるな
私は脱力した。

ますます意味が分からぬ、ケダモノがブヒーって言つただけじやないか……なんで二人ですごい感心しあつてゐんだこいつら。丁寧に説明してくれたつもりなんだろうが、逆にかく乱されたような氣もする。

「あのや……私たぶんこの世界のこと理解できないと思つ」
がつくりと頭を垂れると、イシューとナシロは慌てはじめた。

「そ、それは困る！ あのな、ワンワンとこいつのはつまり生き物の根幹であつて」

「そうです、誰もに当てはまり誰も純粹にはそのものを見たことがないもので」

「あつ、まじ、例えば田の前に虫が飛んできたら田を閉じる、これもワンワンと言えて」

「そうですね、食事をとるのもワンワン、睡眠をとるのもワンワン」
「とにかくワンワンは生活の端々に溢れていゐんだ」

ほ、本格的に頭が痛い。

それから街に着くまでイシューとナシロのワンワン談義は続いた。30分ほどだったが、その間に一生分の「ワンワン」という単語を聞いた気がする。しかもそれだけ説明されたところに、ワンワンの意味は私にはさっぱり理解できなかつたのだった。

5・ルーパにて

「転びそうになつたとき地面に手をつくなのは?」

「ワンワンだ」

「じゃあ歌を歌うのは?」

「それはワンワンじゃありませんね」

「うーん、分かった! ワンワンって反射のことじやない? 突か

れると痛い、みたいな」

「いや、反射はワンワンの一部だけそのものじゃないぞ」

ああ、やっぱり理解できん。

私たちはワンワンについての問答を続けながら宿屋へ向かつていった。ルーパは想像していた以上に大規模な街で、夕暮れ時だというのに通りにはまだ沢山の人が行きかっている。砂漠のすぐ側にこんな立派な町があるなんて驚きだ。

ここではほとんどの建物が石を泥で塗り固めて作つてあるらしく、全体的に白っぽい。通りには布でできた簡易テントが立ち並び、野菜や果物、工芸品が売り買いされていた。

街の人々はイシューたちと似たような格好をしていて、肩から垂らした布がとてもカラフルだ。その雑踏に西日が差して、どうにもこうにも、異国情緒というか、綺麗な光景だなあと思った。ここが異世界だという点についてはもう諦めて受け入れることにした。うん、もういいよどうでも。もはや投げやりな気分なんだ。ワンワンの一件で、説明を求めると言えもう諦めた。

一人の話によると、王宮がある街に帰れば説明の上手い研究者たちがいるので、ひとまずは王都までついてきて欲しいとのこと。気が進まないが、他に当てもないので従つことにした。

ちなみに制服のままでは目立つので、私はさつき借りた紫色の絨

毯をすっぽりと被っている。割と薄着の人が多いこの街では、これでも結構目立つけど。てか、さすがに暑いな……。

街の入り口にあつた検問所でパラウマから降りるよつこと促されたので、私たちは一頭のケダモノを牽いて歩いていた。仮にも王子様が動物への騎乗を制限されるつておかしくないか？ さてはさつきの身の上話は全て嘘つぱちだつたんじやないか……とか思つたりもしたが、街の様子を見て納得した。この大喧騒の中、いくら王子様でもこんなケダモノに乗つてドカドカ歩いてたらヒンシュク買うわな。

今歩いているのはビーチや、らこの街のメインストリートらしい。それにしてもすごい人の波だ。あ、あのテントで売つてる赤い実なんだろう？ あつちの青い葉つぱも、見たことのないものばかりだ。

ついつい気をとられていると、急にイシューに腕を強く引かれた。
「こり、余所見すんな。はぐれたら困るだろ」

「い、いたい」

急に手を握つてくるとは、油断も隙もないヤツめ！

慌ててイシューの腕を振り払い、ナシロの背中に隠れる。イシューは頬を引きつらせていた。

「お、お前……本当失礼なやつだな……」

「失礼なのはそっちでしようが。さつきからスキンシップ過剰すぎ！」

悪人ではなさそつだが、乙女の危機という観点からしてイシューは十分に危険人物だ。私にそんな魅力があるとは思えないけど、どうやら彼らにとつて私は“天秤”とかいう重要人物？ らしく、そのせいで妙な幻想を持たれていますので。

「おい、ナシロから離れる」

「いやだ！ イシューに腕掴まれるぐらいならナシロの絨毯持つてのほうがよっぽどマシ！」

「はあ！？ お前はいいがもしれんがナシロが可哀相だろ、よく見てみろ！」

言われて見上げてみると、ナシロは右手にパラウマ、左手にパラウマという状態で困ったような微笑を浮かべていた。

「いや、私は別にいいんですが……」

「いいや、思つたことはハツキリ言つたほうがいいぞ、ナシロ。この上階中に三三頭めのパラウマがしがみついたんじや、手に負えないだろ」

「誰がパラウマだ！」

ああむかつく。肩をすくめる仕草も、半笑いの意地悪な声も、もう全てがむかつく！

がしかし、悔しいけどイシューの意ひこととももつともなので、渋々ながらナシロからは離れることにした。わみつながら、青いペルシヤ絨毯。

イシューは勝ち誇つた表情でこいつを見ている。な、殴りたい！

…！

俯いて怒りに震えてくるとナシロがぽんぽん、と私の肩を撫でた。「殿下、もう少し女性の気持ちを汲めるようにならなければいけませんよ」

そう、そうだよナシロー。さすがお母さん。もつと言つてやつて…しかしその後ナシロは言わなくていいことを言つた。

「初めて訪れた異界の地。天秤だつて物珍しいに違ありません。宿には私が荷物を入れておきますから、その間にあ一人でゆっくりと市場を見学なさつていてください。どのみち服や装飾品も揃えないといけませんし」

わかつてねえええええ…！ 全然分かつてないよ、お母さん！

「やういうわけで殿下、お任せしましたよ」

言つが早いが、ナシロはパラウマを引っ張つて雑踏の中へ消えて

いつた。ものすごいスピードだ。イリュージョンかなんか。

あつという間にこいつと一緒にされてしまった。恐る恐る隣を見上げると、緊張した様子のイシューと視線がかち合つ。やつはぎこちなく言った。

「し、仕方ないな……行くか」

ねえ、なんで緊張してるのこのひとー。ああ、頬が赤く見えるのは夕日のせいだけだと思いたい。

歩いている間は食べ物の店ばかり目に付いたが、よく見ると衣服や装飾品を並べたテントも多い。これは食べ物のほうが珍しいものが沢山あつたからであつて、私の食い意地が張つているからではない、決して。

嫌な予想に反してイシューは普通だった。ちゃんと着していく限り手を繋がれたりもしなさそうで、少し安心だ。というか逆にちょっとびびられているような。なんでだ。お母さん（ナシロ）がいないと落ち着かないんだろうか。

服を幾つか見ていて気付いたのは、やっぱり王子だけあってイシューたちの服装は他と比べて豪勢だということである。露天に飾られた服の多くは、色鮮やかだけれどもぱつと見ペルシャ絨毯には見えなかつた。安そうなものはイシューたちの肩布と違つて細かい刺繡が施されていなかつたからだ。ただ、意外なことにジャラジャラ鳴る腕輪やガラス玉の連なつたベルトなどは、数や質の差はあれ、皆何かしら身に着けていた。

テントを幾つか覗いた後、ある店の前でイシューは立ち止まつた。

「ここはだいぶいい生地使ってるな。王都までけつこつあるし、この店で好きなのを何着か選ぶといい」

促されて覗くと、なるほど、今まで見た露天の中ではかなり上等なお店のようだ。店の下に敷かれた大判の布の上に、所狭しとばかりに服が並んでいる。テントの奥に座っていたおばちゃんが、いらっしゃいと愛想よく笑った。

これも店を見ているうちに気付いたことだが、こちらの服装には男女の差が殆どなく、個性の主張は肩布と装飾品で行はらし。まず一番下に着るのはゆつたりしたツナギのようなもの。これは色が決まっていて、生成りの白か黄土色が一般的。肩のところで上手いこと結んでサイズ調整を行うつぽい。男性は下がズボン状、女性はスカート状になつたものを着ている人が多い。

だから下に着るものを選ぶのは、あんまり考えなくとも良さそうなのだが……。困った。肩に巻くペルシャ絨毯は一体どういう基準で選べばいいのか分からぬ。

仕方ない、あまり聞きたくないが、ここは現地人の知恵を借りておくべきだろう。

助けを求めるべく視線を送ると、イシューは一瞬怯んだよつて見えた。

「な、なんだ」

「あのさ、ちょっとよくわかんな」から適当に見立ててくれない?」「あ、ああ、それもそうか」

イシューは一つ頷くとぎくしゃくと服を選びにかかつた。いけ好かないヤツだが、ここまでにすれ違つた人たちの服装も参考に考察してみたところ、こいつは割とセンスが良いらし。装飾品やらの店の人から「兄ちゃん洒落てるね」なんて声まで、幾度かかけられていたし。リップサービスかもしれないけど。

まあ、私が選ぶよりは無難なものを見立ててくれるよね、と安心

していたところ、店のおばちゃんの生暖かい目線に気付いた。……なんだろう。

私の前には、女物の服はえらんだことがないから自信はないが、などと眩きつつ服を探すイシュー。あれっ、何だか違和感を感じるんですが何だこれ。

服屋を覗く若い男女の一人連れ。

似合う服を見立てとねだる女。

緊張しながら服を選ぶ男。

あれれ？ この世界の男女交際のやり方は知らないが、もしかしてこれって外から見ると……と、そこまで考えたとき店のおばちゃんが言い放った。

「あつらー、もしかしてあんたたちデート？ まあまあ、最近の若い人たちはよくやるわー。よし、アタシも一緒に選んであげようかね！」

やつぱぱうだつたああああああ！！

イシューがギクリと体を強張らせる。

「ち、違つ、そんなんじやない！」

うん、そうだね確かに違うけど妙に甘酸っぱい感じの反応すんな

！ 逆に肯定してみみたいになつちやつだろー！！

焦る私たちを見て更に勘違いを深めたらしきおばちゃんは、うつふつふ、と笑うのだった。

6・わからない男

「だから違つて言つてるだろ！」

イシューは顔を真つ赤にして声を荒げていたが、おばちゃんの含み笑いに軽くいなされてしまった。

「恥ずかしがんなくていいんだよ、ほら、これとかどうだ」

「恥ずかしがつてなんかない！」

「あんたホントに照れ屋だねえ。あんまり強情はつてると彼女に嫌われるよ。わあ、どれがいいかね、これもこれも、彼女美人だからきつと似合つよお」

「かつ、かの……いや、だからだな！」

おばちゃんはゆつたりした口調とは裏腹に、田にも止まりぬ速さで赤やら緑やらの布を広げていく。実に商魂たくましい。イシューも頑張つてはいるがこれでは何時間かかっても誤解は解けないだろう。どうやらおばちゃんには敵わない、といつのはだいの世界でも共通のようだ。

あまりいい気はしないが、この場では無理に誤解を解く必要もないやうなので、私はイシューの肩をぽんと叩いた。

「わつにこよイシュー、じにまどりあえずそつこいつ」とことこい、わつをと用事を済ませよう

「はー? でもお前、嫌なんじゃないのか?」

「せりや、別に嬉しくはないけど、この場限りのことだし」

イシューは妙な顔をした。

「そつか……まあ、お前がいいな」

「さあさ、どれにするね?」

「あー、ど。そうだな……」

おばちゃんの促しに応じて、イシューは色とりどりの布の前に屈みこんだ。撫然とした表情はそのままだが、頬の赤みはいつの間にか引いてくる。

うーん、なんだかよく分からぬヤツだ。

結局、イシューが選んでくれたのは桃色、深緑、橙色の三枚だった。どれも金やら銀やらの糸で細かな刺繡が施されており、高級そうな一品だ。個人的には深緑色が気に入つた。これは唐草模様にも龍にも見える、絶妙なバランスの柄が縫い付けられていてかっこいいのだ。イシューはその下に着るスカートとズボンも一枚ずつ買つてくれた。そつちは思つたとおり、サイズは関係ないらしい。しかし、異世界でも新しい服を買うとわくわくするもんだね。

買うものを決めるとその場で着付けてもらうことにした。初めての衣服だから勝手が全然分からぬし、教えてもらおうにもナシロやイシューに着替えを手伝わせるわけにはいかないからだ。

おばちゃんに連れられて試着スペースに行こうとすると、イシューがこいつそり言つた。

「言い忘れてたが、その異界の衣装、見つからないよ。見つからぬばれたら騒ぎになる。お嬢さん育ちで自分で脱ぎ着できませんってことにして教えてもらえ」

紫絨毯を被らされた時から薄々感づいてはいたが、どうやらこいつの世界にとつても異世界人は珍しいものらしい。いろいろめんどくさい。

おばちゃんの露店は奥に木箱が積んであり、そこで着替えができるようになつっていた。紫絨毯の下に着ていた制服はなんとかバレないよう片付けて、スカートの方を着せてもらう。ワンピースのように頭から布を被つて、右肩のところであまつた布を結んで……うん、思つたより簡単に着られるみたいだ。

「大きさはこれで良さそうだね。じゃあ今度は上か。どれがいいかねえ」

おばちゃんは買つたばかりの三枚を見比べていたが、ふと私が手に持つている紫色の絨毯に目を留めると、ぽんと手を叩いた。

「あんた滅茶苦茶な着方してたけど、その紫のもよく見りや一級品

じゃないか。夕方から新しいのを卸すのもなんだし、それでやつてあげよ~」「う~

おばちゃんは紫絨毯を取り上げると、あつとこう間に私の体に巻きつけ始めた。「うーん、これ多分ナシロのだから返さなきゃいけないんだけど……まあいいか。ナシロには悪いけどしまりへ借りてもらお~。

しまりへ借りてからちゃんと結んだり引っ張つたりを繰り返した後、おばちゃんは満足そうに私の全身を眺めた。どうやらこれでできあがりらしい。絨毯を巻く工程はちょっと複雑だったが、多分、次は一人で着られそうだ。

「まー、思つたとおりよく似合つね。あなたはえらべ肌が白いから、濃い色が映えるよ」

鏡に映る自分は、今やどこからどう見ても異世界の住人だった。白い生成りのスカートに紫の布を重ね、余った部分が右肩からだらりと垂れ下がつている。つまりイシューたちとお揃い、というわけだ。しかし慣れないと腕に垂れ下がつてた部分邪魔だな。

おばちゃんにお礼を言つて外に出ると、イシューは店の前の木箱に座つて暇そうに通りを眺めていた。

「お待たせ、イシュー」

後ろから声をかけるとヤシは振り向き、あんぐりと口を開けて硬直した。

なんかもう慣れてきたけど、やめるとこういつ青春っぽい反応。

「お、お前それ」

何が原因だか知らないがイシューはしまりへ口をぱくぱくと動かし、急に背を向けて立ち上がつた。

「終わつたならもう行くな~!」

「は? ちょ、ちょっと待つてよ」

「まだどうぞ~」

じつして私たちは逃げるよ~おばちゃんの露店を後にしたのだ

つた。

雑踏の中を早足で歩きながら、イシューの背中を見失わなによつて追つ。

ちくしょう、仮にも女の子連れになんてヤツだ。

本当にワケが分からぬ。

急に距離を縮めてきたかと思えば、おばちゃんにからかわれるだけで真っ赤になつたり、ムキになつたり。

今みたいにマイペースに行動したり。

男友達はあんまり多いほうじゃないけど、イシューぐらいの年頃の男の子つて皆こんな感じなんだろうか。いやいやそんな馬鹿な。

だいたい、と歩きながら私は思つ。

だいたい、イシューの見た目はそれなりに格好いいのだ。それこそ年頃の女の子にわあきやあ騒がれそくなくらいには。すらりと伸びた足、やたらと綺麗な髪の毛、ちょっと生意気そうだけど整った目鼻立ち。それでいて本人の言を信じるならば王子様なわけで、私よりは多分年上。このハイスペックぶりなら女の子と遊び慣れてて良さそうなものなのだけど。

でもイシューと接してみた感じ、その辺りはどうもウブな印象を受ける。でなけりやちょっと店のおばちゃんにからかわれたくらいで、あんなにムキになるはずがない。

もしや深窓のお嬢さん育ちならぬお坊っちゃん育ち？ いや、それにしては下町を歩くのが上手すぎるしな……。

ただ、私はイシューが王子様かどうかは置いておいて、身分の高い人物なのは間違いないと踏んでいる。それ違う人々の装いを見れば、ヤツやナシロの身なりが格段に立派なのはすぐ分かつたし、私の服もぽんと買つてくれたし。（そういえばもし本当に王子様ならこれつて血税つてやつ？）それに初対面の相手に対するこの偉そうな態度、そこそこの地位がなければ身に付かないんじゃないのか？

だつて普通こういうヤツは生意氣だつて殴られたりすると思つ。いや私が殴りたいだけだけだ。

それに輪を掛けで意味が分からぬのが私のことだ。

イシューとナシロは初めて会つた私のことを天秤と呼んだ。それがどういう意味なのか、なぜ私がそう呼ばれるのかは全く分からぬが、彼らにとつて天秤は何か特別な意味を持つものらしい。そして私が天秤だから、イシュー王子さんは出会つたばかりの私を相手に甘酸つぱい何かを撒き散らし続けていと。

……あー、ダメだ、どうしても『天秤』から『青春』に繋がる過程が理解できん。言つておくが私は異世界で出会つた王子様に突然一日ぼれされるよつた、そんな素晴らしい容姿なんぞでは決してない。プロポーションも顔も十人並みだ。恋愛経験も……女子高生になつたことだしこからする予定だつたんだよ！ といいつつ初めての夏は何事もなく終わつてしまつたんだつけ。むなしくなつてきただ。

だから男の子にこんなに近づかれたり、分かりやすくソワソワされるのは初めてのことだ。余計にわけがわからないのだ。一体ヤツの感情はどういつた論理に従つて動いているのだろうと。

「おい」

うーん考えてもわからぬーなどと唸りながら歩いていると、立ち止まつたイシューの背中にぶつかった。

「わつ」

「ぼけつとしないでちゃんと前見て歩いとけよ」

呆れたような声。くう、確かにぼーっとしてたけどいち本当にむかつくヤツだな！ むつとして見上げると、イシューは何故か緊張したように言つた。

「ちょっと休憩してくが、ナシロがいないうちに話しひきたいことがある」

7・続・わからない男

露店で飲み物と果物を買い、私たちは広場の隅に腰を落ち着けた。さつきのメインストリートともう一つ大きな通りとの交差した場所で、他の場所に比べ食べ物を扱う店が多い。中には大きな天幕を張つて、食堂のような体裁を整えてある店もちらほら見えた。

「ほら食べよ」

「ああ、うん」

今まで意識しなかつたが、いざ目の前に食べ物や飲み物があると自分が食えていたことを思い出す。イシューが買つてくれた飲み物はライチのような味で、冷たくて美味しかった。パラウマの背中でナシロに水を分けてもらつたけど、それつきりだつたから余計に美味しい。夢中になつて「ごくごく飲んでいるとイシューが笑つた。

「そんなに喉渴いてたのか？」

「んぐつ。 わ、わるい？」

「いや、気付かなくて悪かつたな。もう一杯貰つてきてやろうつか」「それはいいけど……」

何だかいやに親切だ。不審に思つてよく見てみるとイシューは妙に落ち着きなくそわそわしていた。何だらう。ナシロがいないうちに話しておきたいこと、が関係しているのは間違いなさそうだけど。私の無言の訴えが通じたのか、イシューはぽつりと呟いた。

「お前は俺が嫌いか？」

「はあ？」

「いきなり何を。

イシューはいたつて真剣らしい。思いつめた表情でカップを握り俯いている。

「えーと、『めん。ちょっとよく分かんないんだけど、どうこう』

と？」

「……さつき、腕を掴んだら振り払われたし、顔、近づけたときは、氣まで失ってたし……俺のことが嫌なんじゃないかと、思った」
「ほそぼそと歯切れが悪い上に要領を得ないが、とりあえず分かったのは、こいつが地味に傷ついていたということである。イシューはふてくされたようにするすると飲み物をすすつた。

「そりや、急に近づいたのは悪かった。でもだからって氣絶までするか、普通？ 腕を掴むのも、あんなに拒否されると思わなくて」

だから、トイシューは続けた。

「嫌われたのかなと思った」

気が遠くなりそうだ。トイシューはさつきまでの生意氣ぶりが嘘のようにしゅんとしている。

でも待て、なんだこいつ。

たとえ私に心底嫌われたとしたって、所詮初対面の相手だ。そんなに気にすることだろうか？ もっと言えば、嫌われるのが怖いぐらいうらもう少し違う接し方があつたはずだ。それを好き勝手しておいて、「俺のこと嫌いになつた？」なんて一体どの口が。

だが　だが、しかし。

殴りたいとか髪の毛ちぎりたいとか色々考えた私だが、トイシューのことを嫌いかと言わるとそもそもなかつた。

だつて何だかんだ言つて服買つてもらつたりしたし、悔しいけど世話になつてるとと思うもの。それにあの砂漠にトイシューたちが来てくれてなかつたら、今頃は殺人魔が原因で死亡、なんてことも有り得たのだ。そう考えると感謝してもいいくらいだと思つ。

スキンシップ過多なのは嫌だけだ。

「嫌いじゃないよ

熟考の結果伝えた答えに、イシューは傍目にも分かるほど、ぱりと顔を輝かせた。

「ほ、本当か」

「うーん、私のいた所じゃ、あんまり異性にくつたり触つたりする文化がなかつたから、ああいのは嫌だけど。それさえ無ければ」

「そうか、ありがとう、天秤」

嬉しそうに笑うイシュー。

いけ好かないヤツだけど、根っここの部分は実は結構いいやつなのかもしね。ところで、と私は続けた。

「あの方、ずっと気になつてたんだけど、その天秤、つて呼ぶのどうにかならない？ 私にも一応名前あるんだしさ」

なんかマジメな話になつたから軽く話題を変えよう、程度のつもりで言つたのだったが、何故かイシューはものすく驚いた顔でこつちを見た。

「え、お前、名前あるのか？」

いやいや待て待て。

「あるに決まつてるでしちゃうが！」

「えつ？ 天秤じゃなくて？」

「違うよー。私はナツキ、澤村ナツキっていうの。ちなみにナツキのほうが名前だから」

全く、王子様（多分）の発想は恐ろしい。天秤が何だか知らないが、異世界人だろうが名前くらい普通あるだろ。そんくらい分かれよ。

イシューは虚をつかれたように呆然としていたが、ああ、と呟いてからなぜか嬉しそうに笑つた。

「なんだ、そうか。お前は名前があるのか、そうか、ナツキ。そういうことか」

「へっ？」

急に名前を呼び捨てにされて驚く私にイシューは言った。

「天秤のことは、上手く説明できないから詳しく述べ王都でと話したな。まあ簡単に話すと言い伝えのようなものなんだ。大地を分かつ砂漠の天秤が異界の地より舞い降りる、と。この国では当たり前に知られている神話だし、俺も小さい頃からその話を聞いて育った。天秤が現れるという予言の年が近づいていたから、会える日を楽しみにしてな。どんな姿をしているのだろう、どんな声で話すのだろう、って。憧れみたいなもんだな」

な、なんかえらくスケールの大きい話になつてやしませんか。
神話？ 予言？ やめてよそんなご大層な。

「だから、ナツキに会えて嬉しかつた。伝説の天秤が、憧れの相手によいやぐ、つて。でも俺が想像していた天秤の姿は、勝手な想像でしかなかつたんだな。俺は天秤が自分の役割も知らない娘だなんて考えたこともなかつた。天秤にも名前や、育つてきた世界があるなんてそんなこと、思いもしなかつた」

でも違つたんだな　トイシューの呟く声。

「悪いな、天秤に会えたことに感動しすぎて、ちょっと動搖してた。なんか、やたら触つたり近づいたり。本当に天秤が目の前にいるつて、確かめたくてさ。そんで、お前に嫌われたかと思つて。勘違いされると嫌がなつて、おばちゃん相手にスグームキになつてさ。そもそも同じ年くらいの女と話す機会がなかつたから、恥ずかしいつてのもあつたし。へんなことしちやつたな。でもまあ、これからは気をつけるから」

うーん、分かつたような、分からぬような。

結局イシューの中でわだかまつてた事柄が私の名前によつて何故だか解決されたらしいが、殆どが自己完結みたいなもんだったから、聞いてもよくわからないな。でもまあ、とにかくこいつが本当に根はいいやつっぽいことは分かつた。あと、今後は普通に接するよう気をつけてくれるつてことも。

他の事はきつとこれから関わつていくうちに分かる、だろつ。多分。

「そういえばさ、『天秤』について詳しく聞くのは王都とやらまで我慢するとして。イシュー自身は、天秤に会つてどうしたかったの？」

イシューはすっかり緊張が解けたようで、軽く伸びをしながら私を見て笑う。

「んー？ ガキの頃に思いついたことで、ほんとガキみてーな話だけどさ」

沈みかけの夕日を背に長く三つ編みがきらきらと輝く。
いたずらっぽい笑顔で楽しそうに。

「俺はそいつと友達になりたいと思つてたんだ、ナツキ」

その時初めて、私はイシューを格好いいと思つた。

客観的な観察とかではなく、悔しいことに、心が震える、的な

意味
で。

一瞬でもイシューなんぞに見とれるなんて、どうかしていい。

私はヤツが今までにとったムカつく態度を逐一思い出し、胸のときめき（？）のようなものを追い払うことに成功した。

さつきのはあれだ。美術工芸品を見たら感動する、的な。イシュー一つで顔立ちは綺麗だし。

じゃなければつり橋効果かプラシーボだかビッククリ箱だか、とにかく気の迷いみたいなものに違いない！

だつてイシューは私と友達になりたい、と言つたのだから。私の返事を待たないで、ヤツは歩き出してしまつたけれど。

この国の服装といつのは、ツナギ、絨毯、それからジャラジャラした装飾品の全てが揃つてゐるのが当たり前なのだそうだ。といつわけで、休憩を終えた私たちは装飾品を扱う露店を覗いていた。金や銀のキラキラした腕輪、大振りの石が嵌つたりング、細かい意匠が施された木製のイヤリングなど、種類や材質さまざまなもののが並んでいる。何とも言えず綺麗なものばかりでワクワクしてきた。飾り物つてテンションあがるよね！

イシューは店先にしゃがみ込んで、私のためにあれこれと物色してくれている。

さつきの短い問答でヤツの緊張はすっかり解けたようだ。こちらとしては非常に有難い。いつまでもしゃくした空氣なんて耐えられないもの。

ていうか『スキンシップしまくる』と『緊張して甘酸っぱい空気』の一
点が解決されたら、イシューってけっこつ良いヤツだ。見ず知
らずの私を一応助けてくれたし、服とか買つてくれるし。

まあそれを帳消しにするくらいイヤミでむかつくな！……

しかし、ちゃんと話せば案外いい友人になれるかもしれない。

なんかイシューに対してすごく樂観的というか、友好的になつ
てる氣がするけど、まさか服やら装飾品やらでつられているわけじ
やあるまいな、自分……。それどころかまさかカツコイイとか思つ
ちやつたから……いや、それはない。もしそうなら、いつそ死にた
い。男の趣味悪すぎるだろ。

イシューはめぼしい品を物色し終え、店の人と値段の交渉をして
いる。

「うーん、それにしても。

「さつきから氣になつてたんだけど、イシューって王手をまのくせ
に買い物とか慣れてるよね」

交渉は上手いこと成立したらしい。銀の腕輪、ガラス細工のベル
トと交換に代金を払うイシューに声をかけると、ヤツはニヤリと笑
つた。

「おー、慣れてるぞ。俺は不良だからな。よく抜け出して街で遊ん
でたんだ」

「あ、やっぱそういう感じなわけね……」

「社会勉強つてヤツだよ」

店から離れ歩きながら楽しそうにうそぶく。お城なんて見たこと
もないが、こりやお城の人たちは散々苦労させられたことだらう。
ナシロも含め。

まだ見ぬお城の人たちに同情していると、イシューの腕が目の前
に突きつけられた。買つたばかりの腕輪とベルトだ。

「ちょっと寂しいがどうあえずこれだけ着けとけ

「あ、ありがと」

さすが、というべきか、イシューの見立てた品はあつさつと上品且つ存在感のあるもので、今着てている紫絨毯だけではなく、買った服全てに似合いそうだ。

しかし、この世界に馴染むためとはい、こんなチャラチャラしたもの王様（血税）に買つてもらつて、本当にいいんだろうか……。うーむ。でも、値段交渉もしてたし、さすがに露店で売つてるだけあって、さほど高級なものではなさうだ。お世話になつてもいいかな……。

少し悩みながら受け取ると、イシューは

「あとこれも」

と付け足し、首から下げていた金色のネックレスをはずして寄越した。受け取つてみてきょとする。

ネックレスは露店で買つた腕輪やベルトとは比べ物にならないほど高価そうで、ずつしつと重い。いかにも本物の金ですよ~というオーラを纏つている。

さすがにこれはちょっと……。

私は慌ててネックレスをイシューに突き返した。

「これつてだいぶ高いんでしょ？ 持つてるの怖いからこよ、それにイシューのだし」

「え？ いや、別に……今更かまわんだろ」

「構うよ~ てか今更つて何が今更なんだよ~」

いくら下町に慣れてても、やっぱり王様（贅沢三昧）の金錢感覚は狂つてんな！

イシューは困つたよつに私の胸元を指した。

「だつてそれ、俺のだし」

「え？」

それ？ 何が？

恐る恐る下を見るとオバチャンから「上等だねえー！」と評された紫絨毯が目に入る。そして私は気付いた。

「えつ、これナシロのじやなかつたのー？」

「俺のだよ！ お前がその……砂漠で、氣イ失つたから、風邪でもひくと思つてさ」

そ、そーガ……まさかこいつがそこまで親切な振る舞いをするとは思わなかつたので、ナシロの絨毯だとばかり。

「じめん、勝手に着ちやつて。すぐ返そうか？」

「いい」

イシューはなぜかもじもじと落ち着きのない様子で視線を迷わせている。

しかし、返さなくていいってコレ血税で買つた高級品ですよね！
？ 汚しても弁償とかできませんよ私。 ていうかさつき既にライチ風ジユースちょびつと零しちやつたんだからな！ あとでナシロに謝ろうと思つてたんだからな！

やばいやばい、と焦りつつシミの確認をしていると、

「俺のだけど、やる」

ぶすぐれた様子でイシューが言つた。

え？ やる？ この高級品を？ なんでまたそんな大盤振る舞いな。

びつくりして顔を上げると頬を赤らめたイシューと視線が合つた。ええと、これも夕日のせい……なわけがない、辺りはそろそろ薄暗くなつてきている。えつ、なんで？

「その。よく、似合つてる、と、思つ」

呑きつけるようなぶつきらぼつな声。イシューはそれきり顔を背けてしまった。耳が、妙に赤い。

えーと。

ええーと。

イシューは素直じゃないなあとが、ああだからいつものねばねばやんとこでも態度おかしかったのねーとか色々思ひつけはあるねび、一つだけ。

どうやら私は大きな勘違いをしていたらしい。

『スキンシップ過剰』の危機は去つても、『甘酸っぱい青春』フラグは折れなかつたのだということを。

……イシューとの友人づきあいは前途多難そうだ。

* * * * *

それから微妙な空気を継続しつつ、身の回り品購入行脚は続いた。田はどつぐに沈んでいて、物売りの露店も殆ど撤収してしまつている。

必要なものを買い集め、最後にサンダルを購入したところでタイミングよくナシロが現れた。

「イシュー様、天秤、お待たせしました。お買い物はお済みになりましたか？」

「口二口と微笑むナシロ。会いたかったよお母さん！ しかしこの街広いのによく見つけられたな。

ナシロは私の荷物を『ごく自然な動きで受け取つてくれた。けつこう重くなつてきたところだつたので助かる。

何より助かるのはこの青春真っ只中の王女さまと一緒にりじやなくなるつてことですけどね！

気まずかったのはイシューも同じだったようで、さつままでの態度はどこへやら、急に元気になつていてる。ほんとお母さんで会つた子どもみたいだな。

「買い物なら丁度終わったところだ。でも遅いぞナシロ。何してたんだ」

「すみません、ちょっと医者のところに行つてしまつて」

「え、どこが悪いの?」

思わず尋ねると、ナシロが困ったように笑つた。

「いえその……」

「顎か?」

イシューに指摘され、見てみるとナシロの顎に湿布のようなものが貼られている。アゴ? え、それってもしかして……。

「ははあ、やつきの石頭が効いたか」

イシューが意地悪く言つた。

さつもの、つてパラウマの上で田を覚まして、ナシロの顎に頭ぶつけたときのこと……だよね。

うわあああ、やつぱり!?

なんかあの時凄い音したもんね、そりや腫れたりするよね!

「い」、「ごめんナシロ」

「いこいんです、たいした怪我じゃありませんから」

「そーかあ? 丈夫なのが取り柄のおまえが医者にかかるなんて、よっぽど痛かつたとしか思えないけどな」

「ひいいい! ほんとごめんなさい!」

「大丈夫です、私が大げさにしそぎてしまつただけで、医者にもすぐ治ると言わされましたし。お気になさらないでください」

「ナシロ……」

ほんと「ごめんナシロ。痛かつただろうにむしろ私を気遣つてくれるあなたは本物のお母さんより温かい存在だよ……。

「いやー石頭は怖いなー」

それに引き換えあなたの息子は最低だよ、どんな教育したんだよホント。本気で落ち込む私をよそに、ケケケと笑うイシュー。

むかつぐ。まあ緊張状態じゃなくなつたのはよかつたけどやー。

三つ編みは引きちぎつておくべきな気がする。

それにしても、仮にも王子様のお付きの人に、怪我なんか負わせて大丈夫なのか、私？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6010y/>

マハラジャ人々

2011年11月29日21時47分発行